

古代ギリシア文化研究所

## 第2回 西洋古代史インターユニ・ワークショップ プログラム

日時：2021年8月7日(土) 13:00 - 17:00 (途中入退室自由)

参加 URL :

<https://us02web.zoom.us/j/85407712567?pwd=NDVhR043OUdrRmZkMktZZUw5YmVydz09>

ミーティング ID: 854 0771 2567

パスコード: Y65D9a

13:00 - 13:05

開会の辞 周藤 芳幸 (名古屋大学)

13:05 - 13:30

### I 特別講演

齊藤 貴弘 (愛媛大学)

「史料としての法廷弁論」

13:30 - 15:00

### II 卒業論文構想発表 第一部 (発表①~⑥、一人あたり質疑応答を含めて15分)

① 劉 静寧 (筑波大学)

「古代ギリシアの白地レキュトスにおける死者の表象 ——「墓辺図」の作例に基づいた考察」

② 岸田 昂樹 (関西学院大学)

「ヘロドトスとスキュタイ人 —『歴史』におけるヘロドトスの関心をめぐって—」

③ 萩原 佑悟 (神戸大学)

「紀元前4世紀初頭のギリシア人傭兵の実態 —クセノフォンの『アナバシス』を中心に—」

④ 諏訪 文香 (大阪大学)

「共和政・帝政ローマの饗宴文化について」

⑤ 坂野 水咲 (京都大学)

「紀元前1世紀から紀元2世紀にかけての、ローマ人の食とアイデンティティの関わり」

⑥ 中西 美結 (慶應義塾大学)

「ローマ帝国における豚肉の栄養についての認識」

15:00 – 15:15

休憩

15:15 – 17:00

Ⅲ 卒業論文・修士論文構想発表 第二部（発表⑦～⑬、同上）

⑦ 高橋 和之（愛媛大学）

「ゲルツァー論批判と共和政末期における史料の制約—キケロによる弁論・演説の性質—」

⑧ 伊藤 結（慶応義塾大学）

「古代ローマのアウグストゥス帝期における首都ローマの社会秩序について」

⑨ 小山 馨太郎（東京都立大学）

「元首政期ローマ帝国における元老院議員と辺境支配 —ネロ帝期のモエシア総督 Ti・プラウティウス・シルヴァヌス・アエリアヌスの場合」

⑩ 金子 雄太郎（明治大学）

「属州ブリタニアにおける円形闘技場の意義・役割について」

⑪ 金田 馨（学習院大学）

「古代ローマ軍人皇帝時代における軍制改革について（ウァレリアヌス帝～ディオクレティアヌス帝まで）」

⑫ 小林 卓（名古屋大学大学院）

「ローマ帝政後期におけるミトラス教衰退 —「タウロクトニ」に表象されるミトラス教世界と碑文にみる教徒の姿」

⑬ 野々瀬 真理（東北大学大学院）

「ファウヌスの家のモザイクにおける動物表象について」

17:00 – 18:00

懇親会（ネットワーキング）

## 発表タイトル(仮題)と概要 (発表順)

### ① 劉 静寧 (筑波大学 芸術専門学群 4年)

#### 「古代ギリシアの白地レキュトスにおける死者の表象 ——「墓辺図」の作例に基づいた考察」

白地レキュトスは前5世紀頃にアッティカで死者を記念することを目的に盛んに制作されたことから、その上に描かれた陶器画は当時のギリシア人の死生観を直接に反映しているに違いない。本卒業研究においては、「アキレウスの画家」による「墓辺図」の作例を取り上げ、とりわけその個性的表現に注目し、不可視の存在である死者とその魂のイメージである「エイドロシ」がいかにか表現されているか、ひいては古代ギリシア人の死生観について考察することを目的とする。

### ② 岸田 昂樹 (関西学院大学 文学部 2020年卒業)

#### 「ヘロドトスとスキュタイ人 —『歴史』におけるヘロドトスの関心をめぐって—」

本論の目的は、ヘロドトスの『歴史』における異民族表象の様態を明らかにすると同時に、それを通して歴史学の方法論について考察することにある。初めに、前6～4世紀の古代ギリシアの文献や陶器画におけるスキュタイ人表象と『歴史』4章における表象の比較を通し、ヘロドトスにおける異民族表象の特徴を明らかにする。そしてF.アルトークに代表される先行研究ではその特徴を適切に説明できていないこと、またその誤謬が構造主義的な還元主義にあることを指摘し、それとは異なる歴史学的方法論の必要性を主張する。

### ③ 萩原 佑悟 (神戸大学 文学部 4回)

#### 「紀元前4世紀初頭のギリシア人傭兵の実態 —クセノフォンの『アナバシス』を中心に—」

古典期、特に前4世紀初頭のギリシア人傭兵の活動を中心に考察する。構成としては、まず初めに前古典期・古典期のギリシア傭兵の活動を概観し、それから、ギリシア傭兵の実態について具体的な情報を伝えている数少ない一次史料である『アナバシス』について検討する。そこから見えてくる傭兵の実態がこの時代の傭兵全般に当てはめられるのかどうかという視点も交えながら、彼らの戦地での状況や行動、その理由などについて考えたい。

### ④ 諏訪 文香 (大阪大学 文学部 4年)

#### 「共和政・帝政ローマの饗宴文化について」

古代ローマの饗宴全般、特に共和政末期から帝政期にかけて富裕層・支配者層によって執り行われた饗宴について取り扱う。彼らは私財を投じて市民に公共の建築物や大規模な見世物、祝宴を提供することによって大衆の認知を得て、政治的に有利な立場に立とうとした。こうした饗宴の利用がローマ社会に及ぼした影響について、皇帝をはじめとする饗宴文化の担い手となった人々に注目しながら考察する。

### ⑤ 坂野 水咲 (京都大学 文学部 4回)

#### 「紀元前1世紀から紀元2世紀にかけての、ローマ人の食とアイデンティティの関わり」

紀元前1世紀から紀元2世紀にかけて、ローマ人のアイデンティティ(「ローマ人らしさ」と認識されていたもの)

に食がどのように関係していたといえるか、また、都市と農村、エリート層と庶民などの間で、食が自己認識に果たしていた役割には違いがあるのか、といったことを『ガリア戦記』や『ゲルマニア』などの文献史料をもとに調べたい。また食が彼らのアイデンティティを構成する要素の一つだったといえるならば、ローマ化の議論にもつなげることができないかと考えている。

#### ⑥ 中西 美結（慶應義塾大学 文学部 4 年）

##### 「ローマ帝国における豚肉の栄養についての認識」

古代ローマ帝国の食事について、かつては穀物、オリーブ、ブドウの三つが中心とされていたものの、近年考古学のデータによって食肉の重要性が見直されている中で、食肉についての当時の認識に関心を持っている。その中でもよく食べられていた豚肉は、医学者から栄養の観点でどのように考えられていたかをまとめた。

\*\*\* 休憩 \*\*\*

#### ⑦ 高橋 和之（愛媛大学法文学部 4 回生）

##### 「ゲルツァー論批判と共和政末期における史料の制約—キケロによる弁論・演説の性質—」

共和政末期のクリエンテラの影響に関する論争を、諸研究が依拠する史料の制約から分析する。ゲルツァーが提示した、ノビレスがクリエンテラを通じてコンスル職を独占したとする構図は、1980年代の批判によってかつてほど支持されなくなったが、ゲルツァー論批判の根拠となるキケロの史料の特徴（虚偽・誇張・事実隠蔽）に着目することで、批判する側にもまたゲルツァー論と同じく史料の質的・量的制約を免れ得ていないということを主張したい。

#### ⑧ 伊藤 結（慶應義塾大学 文学部 4 年）

##### 「古代ローマのアウグストゥス帝期における首都ローマの社会秩序について」

アウグストゥスが行った都市の秩序を守るための法律や政策が実際の民衆にとって実際にどれほど効果があったのか、どれほど社会秩序を守っていたのか、民衆の目線から実態を探ることが論文の主旨である。それを探る上で、プラエトリアニや消防隊などの治安維持に関わった機関について調べつつ、それらの功績から民衆への影響を推測する。民衆が皇帝の政策や当時の治安についてどのように感じていたかを探るのは困難だが、残された資料から皇帝の政策や治安維持部隊の功績を調べ、ローマの社会秩序がどのように守られていたかを分析したい。

#### ⑨ 小山 馨太郎（東京都立大学 人文社会学部 4 年）

##### 「元首政期ローマ帝国における元老院議員と辺境支配 —ネロ帝期のモエシア総督 Ti・ブラウティウス・シルヴァヌス・アエリアヌスの場合—」

ネロ帝期のモエシア総督ブラウティウスの墓碑銘を翻訳・検証し、従来の研究が彼の業績に下してきた評価を再検討することで、元首政期ローマにおける元老院議員像の一例と、黒海方面におけるローマの辺境政策の実態を明らかにすることを目指す。

#### ⑩ 金子 雄太郎（明治大学 文学部 4 年）

### 「属州ブリタニアにおける円形闘技場の意義・役割について」

属州ブリタニアのような辺境地域の円形闘技場は、軍事施設に隣接する立地から、士気の維持や軍事訓練用との説明がなされてきた。しかし実際には、ロンドンのような都市やキウィタスの首邑など、異なる性格をもつ場所にも円形闘技場は建設されており、一概に軍事用であったとは言い切れない様子が見えてくる。それぞれの建設・改築の年代や分布等を基に、ブリタニアにおいて円形闘技場はどのような社会的役割を持ちえたのかを、明らかにしたいと考えている。

### ⑪ 金田 馨（学習院大学 文学部 4年）

#### 「古代ローマ軍人皇帝時代における軍制改革について(ウァレリアヌス帝～ディオクレティアヌス帝まで)」

長きにわたり平和と繁栄を享受してきた古代ローマは、三世紀半ばに未曾有の混乱期に突入し、多くの篡奪者が現れては倒れていく政治的混乱に陥り、「3世紀の危機」と評されている。この時代に統治構造の再編を遂げたことが帝国の安定化をもたらし、危機を乗り越えたということを論証するにあたり、騎兵軍改革による機動軍の形成などの軍事的側面や、元老院が権力を失うプロセスなど多角的な視点から考察する。

### ⑫ 小林 卓（名古屋大学大学院 人文学研究科 2年）

#### 「ローマ帝政後期におけるミトラス教衰退 —「タウロクトニ」に表象されるミトラス教世界と碑文にみる教徒の姿」

ローマ帝政後期におけるミトラス教の衰退の原因を探るために、碑文史料を通じてミトラス教徒のプロソポグラフィを分析するとともに、「タウロクトニ」の図像表現の地域的・時系列的な検討を通じて、ミトラス教徒がこの信仰に何を求めていたのかを解明したい。

### ⑬ 野々瀬 真理（東北大学大学院 文学研究科 2年）

#### 「ファウヌスの家のモザイクにおける動物表象について」

ファウヌスの家の《鶏を襲う猫、魚介、ハスを啜えたカモのモザイク》と、《魚モザイク》は、それぞれアトリウムからペリステリウムに続くアーラ(翼室)、トリクリニウムに設置された。先行研究において、両作例ともアレクサンドリアの工房の作品との類似が指摘されている。その一方で、モチーフが表す意味や独創的な構図については、焦点が当てられなかった。今回は《魚モザイク》を中心に据え、古代の文献資料を参照しつつ、そこに込められた意味や表現の独自性について考察したい。